132X
180
1

二楽軒宋世

伊勢物語

外題持明院基時卿

川勝宗久

ワ百拾弐

物語

むかしおとこうゐかうふりしてならの
京かすかの里にしるよしゝて狩に
いにけりその里にいと
なまめいたる女はらからすみけりこの男
かいまみてけりおもほえすふるさとにいと
はしたなくてありけれは心ちまとひに
けりおとこのきたりけるかりきぬ
のすそをきりてうたをかきてやる
その男しのふすりのかりきぬをなむ
きたりける

かすかのゝわかむらさきのすりころも
しのふのみたれかきりしられす
となむおひつきていひやりける ついて
おもしろきことゝもや思ひけむ
みちのくのしのふもちすりたれゆへに
みたれそめにし我ならなくに
といふ歌の心はへなり 昔人は
かくいちはやきみやひをなむしける
むかしおとこありけり ならの京は
はなれこの京は人の家また
さたまらさりける時に西の京に
女ありけり その女世人にはまされり
けり その人かたちよりは心なむ
まさりたりける ひとりのみもあらさり
けらし それをかのまめ男うちものかた
らひてかへりきていかゝ思ひけむ
時はやよひのついたち雨そほふるに
やりける
おきもせすねもせてよるをあかしては
春のものとてなかめくらしつ

むかし男ありけりけさうしける女
のもとにひしきもといふものをや
るとて
思ひあらはむくらのやとにねもしなん
ひしき物には袖をしつゝも
二条の后のまたみかとにもつかう
まつり給はてたゝ人にておはしまし
ける時の事なり
むかし東の五条におほきさいの
みやおはしましける西のたいにす
む人ありけりそれをほいにはあらて
心さしふかゝりける人ゆきとふらひける
を正月の十日はかりのほとに
ほかにかくれにけりありところはきけ
と人のゆきかよふへき所にもあらさり
けれはなをうしと思ひつゝなん
ありけるまたの年の正月にむ
めの花さかりにこそをこひていきて
たちて見ゐて見見れとこそに似へくも
あらすうちなきてあはらなるいたしきに

なるいたしきに月のかたふくまて
ふせりてこそをおもひいてゝよめる
月やあらぬ春やむかしのはるならぬ
我身ひとつはもとの身にして
とよみて夜のほのほのとあくるに
なくなくかへりにけり

むかしおとこありけりひむかしの五
条わたりにいとしのひていきけり
みそかなる所なれはかとよりもえ
いらてわらはへのふみあけたるついひ
ちのくつれよりかよひけり人しけ
くもあらねとたひかさなりけれは
あるしきゝつけてそのかよひちに
よことに人をすへてまもらせけれは
いけとえあはてかへりけりさてよ
めるうた
人しれぬわかかよひちの関守は
よひよひことにうちもねなゝむ
とよめりけれはいといたう心やみけり
あるしゆるしてけり二条のきさきにしのひて

二条の后にしのひてまいりけるを世のきこえあ
りけれはせうとたちのまもらせ
給ひけるとそ
むかし男ありけり女のえうましかりけるを
年をへてよはひわたりけるをからうして
ぬすみ出ていとくらきにきけりあくた
河といふ河をゐていきけれは草のうへに
をきたりける露をかれはなにそとなん男に
問ひける行さきおほく夜もふけにけれは
鬼ある所ともしらて神さへ
いといみしうなり雨もいたうふりけれは
あはらなるくらに女をはおくにをし
いれて男ゆみやなくひをおひて戸
くちにゐてはや夜もあけなんと思
つゝゐたりけるにおにはやひとく
ちにくひてけりあなやといひけれと
神なるさはきにえきかさりけり
やう／＼夜もあけゆくに見れはゐてこし女
もなしあしすりをしてなけともかひなし
白玉かなにそと人のとひし時
露とこたへてけなましものを

しら玉かなにそと人のとひし時
　露とこたへてきえなましものを
これは二条の后のいとこの女御
の御もとにつかうまつるやうにてゐ
給へりけるをかたちのいとめてたくお
はしけれはぬすみておひていてたりける
を御せうとほりかはのおとゝ太郎
国経の大納言また下らうにて
内へまいり給ふにいみしうなく人ある
をきゝつけてとゝめてとりかへし給
うてけりそれをかく鬼とはいふなりけり
またいとわかうて后のたゝにおはし
ける時とや
むかしおとこありけり京にありわひ
てあつまにいきけるに伊勢おはり
のあはひの海つらを行くに浪のいと
しろくたつをみて
　いとゝしくすきゆく方のこひしきに
　うらやましくもかへる浪かなとなむよめりける
むかし男ありけり京やすみうかりけむ

あつまのかたにゆきてすみ所もとむ
とてともとする人ひとりふたりしてゆ
きけりしなのゝくにあさまのたけに
けふりのたつをみて
しなのなるあさまのたけにたつ煙
をちこち人のみやはとかめぬ
むかし男ありけりそのおとこ身
をえうなき物に思なして京にはあら
しあつまのかたにすむへき國もとめにとて
ゆきけりもとよりともとする
する人ひとりふたりしていきけり道しれ
る人もなくてまとひいきけり三河の
くにやつはしといふ所は水ゆく川
のくもてなれは橋をやつわたせる
によりてなむやつはしといひける
その澤のほとりの木のかけにおりゐてか
れいひくひけりその澤にかきつはた
いとおもしろくさきたりそれをみて
ある人のいはくかきつはたといふいつもしを
くのかみにすへて旅の心を

よしや此峯れんよしなし
いかなる川くるゝ水に妻まては
たはくさあるなかにいはほ
こゝなり峯れん三れ人をしなき
はなさいおもてなりとおもひはへる
くてすみのくにいるなかの川の
ほとりにて はるいはれ人ゝすみゐ
いはくらのはしきさまはさかりて志
三年せてもの心あそくすみかはるめ
往三ほ事にあり梅すゝむ老ある

哥名所をもちいろてゝ道すゝ
いまは梅若れ人のひとこれ京に
その人の君御名ゆやにさく梅のさき
て候く
するりゆるゝ川の辺のつかに
墓にふし人あまたありけり
常の念仏三月十五日のほとり梅若
にさかりを楊あり
時しらぬ山にやの孫に川よその
かのこまくらに露丸わすれ

世の山はこゝにふもとにてかすみの山城
ろくらうかさねあきまつせ濃と
志くなるは浮はなりけりやかたに寄る
ありす浮たるみゆきてむかしの
ことはの宇治川舟さのくにとのるま
いとおほきなる河あり浮嶋さ
き川と云ふその川のかはの水まさ
りくあり又是はかけられしさそて
きふかるかれとまいあつまふきてしる
又や舟まの走り見え首なこいはし

てわたる人ミすくなふミれしをのせて
そて京がなみ人なきにしをあらす
さ浮ぞきてきろきミろうみて
めとゝいふ武士のおほきにある
水の面まあそおい川いかにみ
宇治は見てあそぶるれはきる人ミし
らすまくしをわかにこひしされはに濃ん
ゆくこともやとめてかきて
おもしおはしいさ事こそ又なる
まかなり人にありやかやと

ことわりなれは舟にのりてきにけり
むかしおとこむさしのくにまてまと
ひありきけりさてそのくにゝある
女をよはひけりちゝはこと人にあはせ
むといひけるをはゝなむあてなる
人に心つけたりけるちゝはなをひと
にて母なむふちはらなりけるさてなむ
あてなる人にとおもひけるこのむこ
かねによみておこせたりけるすむ
所なむいるまのこほりみよしのゝ
さとなりける
みよしのゝたのむのかりもひたふるに
君か方にそよるとなくなる
むこかねかへし
わか方によるとなくなるみよしのゝ
たのむのかりをいつかわすれむ
となむ人のくにゝてもなをかゝる
ことなむやまさりける
むかし男あつまへゆきけるに友たち
ともにみちよりいひおこせける

わするなよほとは雲ゐになりぬとも
空ゆく月のめくりあふまて

むかし男ありけり人のむすめをぬすみてむさしのへゐてゆくほとにぬす人なりけれはくにのかみにからめられにけり女をはくさむらの中におきてにけにけりみちくる人この野はぬす人あなりとて火つけむとす女わひて
むさし野はけふはなやきそわかくさの
つまもこもれり我もこもれり
とよみけるをききて女をはとりてともにゐていにけり

昔むさしなる男京なる女のもとにきこゆれははつかしきこえねはくるしとかきてうはかきにむさしあふみとかきておこせてのちおともせすなりにけれは京より女
むさしあふみさすかにかけてたのむには
とはぬもつらしとふもうるさし

とあるを見てなむたへかたき心ちしける

とへはいふとはねはうらむ武蔵あふみ
かゝるおりにや人はしぬらん

むかしおとこみちのくにゝすゝろに
ゆきいたりにけりそこなる女京の人
はめつらかにやおほえけむせちに思へる
心なむありけるさてかの女

中/\にこひにしなすはくはこにそ
なるへかりける玉のをはかり

哥さへそひなひたりけるさすかにあはれ
とや思ひけむいきてねにけりよふかく
いてにけれは女

夜もあけはきつにはめなてくたかけの
またきになきてせなをやりつる

といへるにおとこ京へなむまかるとて

くりはらのあねはの松の人ならは
宮このつとにいさといはましを

といへりけれはよろこほひて思ひけらし
とそいひをりける

むかしみちのくにゝてなてふことなき

人のあやにくに心まよはしてやさしさる
までありやき女子をのみ好みけれは
世はふるきのさくかふるきかはれ
人の心れはてさりぬるうへ
世をわたくしてこそありとさま
なるをきこえし心はえていはて世人
むかしきのありさま猶ゆかしく人はなかり
その清かたふつかしまゐりて時より
あはれと後世をかけつゝたのむ
よの川神の人をよこそはあすかなり

うつりてこそてあたらしき事あるの
ミてはまた少人をもにきまいりける
をたつねしかはかりけりのこゝろを世
うけ神のいまいひ次に此あるれ
あるおやりくこゝろわすれ川行
あまたなりて神のさかりてなか
寺所へ接く式男まいらふむ川
ましき事にてあるなれいまはと
武はあるれと思ひなかりとゝまり
とするさたなかりけりいふ

秋も既にありし年ごろこそ見えしの
神は物しくつまじくまかり出にけるを何事
をかしかりけるを定めてはかの寺
にはかにおほえけれ
手紙書りてありける事成つかはし梅
こそやがて人つかはしける
かゝる事ならこそきこえしにあはれを
前そよ我御物てなりてよむ
年来まで十二ところにつかはしける
いとよしなき筆のこそあまた

我もよしみちなれ人
これやこの行くも帰るも別れて
君かことをまつにてかゝりつなれ
よろこびの事に及ぶへし
秋や今朝露やまかねとふる衣
あるは涙のひまもなく何かする
ことし此世にまかりし人の桜咲
小さかり年も忘れはてゝ
かゝりしに花さえ忘れて咲く桜も
こゝにはわかる人を結びかな

返し

宇梅干はあすのさ雪にて流れけり
きゝ涙はあすの花とみんかも

をかしなま酒なる女ありけり男ちかう
ありけり女さけのむ人なりけれは
心みむとて菊の酒のうつろへるを
おりて持て此許へやる

紅に匂ふはいつら白雪の
えたもとをゝにふるかとも見ゆ

男しらすよみによみける

紅井に白梅かうへの白菊は
をりける人の袖かとも見ゆ

をかし村ときく文川の下宇治女の方
にて時の名酒人あひしりたり
ほとなくかれにけり同し所なれは
白酒女のめには見ゆるものから男は
ある物とも思ひたらす女

天雲のよそにも人のなりゆくか
さすかにめには見ゆるものから

とよめりけれは男返し

あまくものよそにのみしてふる事は
わかゐる山の風はやみなり
とよめりけるはまたおとこある人となん
いひける

むかし男大和にある女を見てよはひて
あひにけりさてほとへて宮つかへする
人なりけれはかへりくる道にやよひ
はかりにかへての紅葉のいとおもしろき
をゝりて女の許に道よりいひ
遣る

君かためたおれる枝は春なから
かくこそ秋のもみちしにけれ
とてやりたりけれは返事は京に
きつきてなむもてきたりける
いつのまにうつろふ色のつきぬらん
きみかさとには春なかるらし

むかし男女いとかしこく思ひかはして
こと心なかりけるをさるをいかなる事か
ありけむいさゝかなる事につけて世
中をうしと思ひていてゝいなむと思ひて

おもひてかゝる哥をなむよみて物にかきつ
けゝる
いてゝいなは心かるしといひやせむ
世のありさまを人はしらねは
とよみをきて出ていにけりこの女か
くかきをきたるをけしう心をくへき
事もおほえぬをなにゝよりてかゝらむと
いといたうなきていつかたにもとめゆかむ
とかとに出てとみかうみゝけれと人
いつこをはかりともおほえさりけれはかへ
りいりて
おもふかひなき世なりけりとし月を
あたに契りて我やすまひし
といひてなかめをり
人はいさおもひやすらむ玉かつら
おもかけにのみいとゝ見えつゝ
この女いとひさしくありて念しわひ
てにやありけむいひおこせたる
いまはとてわするゝ草のたねをたに
人の心にまかせすもかな

返し
まれ草に根をふかくもなきたる
おりしも雪のまりこいたうちとけなし
又あふましとも申ける事にいひかけてく
をとこ
まちわひぬ心のうちはあそふは
あまたなる事に物をおもひき
返し
まことにもちからなきの給く
身のなるさまにてなりけれ
こいひけれを北のかたに給はれし
まいて給ふ事
むかしさるかてあるに中を
やすけれさに事むつ女の許に
きまさんかへしくを上給
かくてきて給ふてたき
こといたくおりしかはかはく
をとこ
あはれてふ心をいはんかりしまの
水のなさまてあはしに思ひ枝

とはいひけれとその夜いにけりいにしへ
ゆくさきの事ともなといひて
秋の夜のちよを一夜になすらへて
やちよしねはやあく時のあらむ
かへし
秋の夜のちよを一夜になせりとも
ことはのこりてとりやなきなむ
いにしへよりもあはれにてなむかよひける
昔ゐなかわたらひしける人の子とも
ゐのもとにいてゝあそひけるをおとなに
なりにけれは男も女もはちかはしてありけれと
男はこの女をこそえめとおもふ
女はこの男をとおもひつゝおやのあはすれともきかてなむ
ありけるさてこのとなりの男のもとより
かくなむ
つゝゐつのゐつゝにかけしまろかたけ
すきにけらしないもみさるまに
女返し
くらへこしふりわけかみもかたすきぬ
君ならすしてたれかあくへき

などいひいひてつゐにほいのごとくあひ
にけりさて年ごろふるほどに女おやなくたよりなくなるままにもろともに
いふかひなくてあらんやはとてかうちのく
にたかやすのこほりにいきかよふ所いで
きにけりさりけれどこのもとの女あし
と思へるけしきもなくていだしやり
ければおとこことごころありてかかるにやあ
らんと思ひうたがひてせんざいのなかに
かくれゐてかうちへいぬるかほにて見れば
この女いとようけさうじてうちながめて

風吹けばおきつ白浪たつた山
夜はにや君がひとりこゆらむ

とよみけるをききてかぎりなくかなしと
思ひてかうちへもいかずなりにけりまれま
れかのたかやすにきてみればはじめこそ
心にくくもつくりけれいまはうちとけて手
づからいひがひとりてけこのうつは物
にもりけるを見て心うがりていかず
なりにけりさればかの女やまとの方
を見やりて

君かあたりみつゝををらむ伊駒山
雲なかくしそ雨はふるとも
といひてみいたすにからうしてやまと
人こむといへりよろこひてまつに
たひ／＼すきぬれは
君こむといひし夜ことにすきぬれは
たのまぬものゝこひつゝそふる
といひけれと男すますなりにけり
むかし男かたゐなかにすみけり男宮
つかへしにとてわかれをしみてゆきける
まゝに三とせこさりけれはまちわひ
たりけるにいとねむころにいひける人にこ
よひあはむとちきりたりけるにこの男
きたりけりこの戸あけたまへとたゝ
きけれとあけてうたをなむよみて
いたしたりける
あらたまのとしの三とせをまちわひて
たゝこよひこそにゐまくらすれ
といひいたしたりけれは
あつさゆみまゆみつきゆみとしをへて

まつせしかとことありしミせよ
こゝひくいむしとし候れは女
あはさうき候まし給ともしらわ
いはなれはよりしもの哉
こゝろをはれと男かたりに女はとかれし
きくきりにありそひ給けとえ
なひかにて清水のある所よりに
かうさに御らん候にあはれのちく
つき川候する
あひなとそて給ふある大にぞてかね
わか身は今世きえてもあな笛
三つきてもこふいふは小歳に候
むかしは有をめしさはふる
候女のさまつのいはを聞よ出
やのと候は
秋のよにいつし事かさの世
あそこにありけそこちもかるる
名このミありし女の
在る女郎さくらの身の候にや
の給ふてまゐのいりてゆくゝ哉

むかし男五条わたりなりける女を
えゝずなりにける事とわびたりける
人の返ごとに

おもほえずそでにみなとのさはぐかな
もろこし舟のよりしばかりに

むかし男女の許に一夜いきてまた
いかずなりにければ女の手あらふ所に
ぬきすをうちやりてたらひのかげ
にみえけるをみづから

我ばかり物思ふ人は又もあらじ
とおもへば水の下にもありけり

とよむをこざりける男たちきゝて

水口に我やみゆらんかはづさへ
水の下にてもろごゑになく

むかし色このみなりける女いでゝ
いにければ

などてかくあふごかたみになりにけん
水もらさじとむすびしものを

むかし春宮の女御の御かたの花の

此ふかしかは川ときゝしかあの名なり
業平の ねよけはさいはせしに
字梅のことはにる付たるし
むかし男大川かたわる国女の許より
其事は玉の此ゝそりおりて
語ぐ哀ふのみならすゆかず
むかしえのくにゝてありたりつ
此林の事つけてわかすのふなきあ式
いふの首尾むかしや草葉をたつとん
仍かくむかし極おとこ
つきゝ人の字ほすれ字じ
此のかくそおほえふ明る
此ニ極残林むかし女ありける
むかし物云字国女ありて
いふしへの三川のさきはさら也し
むかし残合するすらしき式
三つありたれこたゆまゝ思ひすあり
字書
むかし男やまとのくにゝむかしの川の
かよひ字国女ゝのうちいつきてそ

いてかりつる宰相きる絵人たちに
め庭の今ちゝる土日のいやまね
君か心残おりしますか那
也
こゝに昔ありふてろといひて
丹寺さはのさして寺さ
ねれ人の事にてかしやめしや
むかしおとこ川まるかり宰隣人の許に
いえ之小いえねて腑まさいり絵く
宮川まるけり之ろ那
おもひてはいへるもの思ひ
むかし宗にあそてあそふる人の許に
むめの花をめてたつねてむすひ遣
あるにて乃塩まあるんこそ画
昔はれわらはなりけるひとのもとなる
女の許に
若者に頼にてへるあまりかりて
あふ人ことに我おもはゝかくまし
むかし男いろこのみなる女を
いへりけりされとにくゝはあらさりけり

こまれるて下さきことれしなさかめ
ツメの字傍ぬ花はいつりて
也
すり大くむすみひ戒律て
あいろうまていこりし傍田
むりしきの方り川称あいきるかふ
あり方て北そくきさ字まりふりうて
風の字傍
君ふりのみなむらぬ世中乃
人いこれをや立ふつい柳ん

也
多ねて世の人を武なり戒のいと
立とはい柳とこそりをを
むりしさい彼の子と中す力を
り偏多や花の子とのにこたへい
こや中すいまそりの字あの清こ
世終くおけんちるりの秋を試あ
こ所り此字傍ありこにて大方乃丸来
その筆ふあいのりて出されの字まり
いふれ言さりて佗ぬくいて画てまつも

うちなきてやみぬへかりけるあひたに
あめの下の色このみ源のいたるといふ
人これも物見るにこの車を女
車と見てよりきてとかくなまめく
あひたにかのいたる螢をとりて女の
くるまにいれたりけるを車なりける
人この螢のともす火にや見ゆらん
ともしけちなんするとてのれる
男のよめる
いていなはかきりなるへみともしけち
年へぬるかとなくこゑをきけ
かのいたるかへし
いとあはれなくそきこゆるともしけち
きゆるものとも我はしらすな
あめの下の色このみのうたにては
猶そありけるいたるはしたかふかおほち
なりみこのほいなし
むかしわかき男けしうはあらぬ女を
思ひけりさかしらするおやありて思
ひもそつくとてこの女をほかへおひやらん

三寸さんはかりなる女今の
こゝろはいましこゝいさかひゐるなれとて
むかしはさかひける女をやしなはれけるま
ねちかくゐさるあひたおもひはやすさ
なふまけるにはふかおやこの女ぞおもひ
川男ちの涙とともにまよひこゝろよし
またていてくいね男ありくよる
いふこゝろえあはれ別のことわた
かくしにまけるを物にも昭し也
ことしそ女を入まなかはやめてなら

ほかりしはこれ計かいたくし去
かれまこ思ひ物す去ちよあこゝにいて
まれいまとえて都そありて桜の
人あはれなるありて又の日のあ
のみわたゝもの雅しくいきおり
あかさむもつれあはぬなりけり
物がたりの女をしきまいまのたまる
まさに去るもや
昔女つまの雅からも有けるに
やんごとなき男のまめしきをあて

なる男ともひとりふたりやしき男なる
吉才の川こそわたしのさふみなみあり
とく羊はうこそうまわ心はいくしけり
まれこさ給やしきまはてきこまわ
名総人うへのさぬうくはくり所りく
まわせんくこそうくて見くるきふる
武まわこれはのあてなる男きて
てこゝ向りうまれ人いかきうなる
ありはしりへのさかはかへいて所
かそく

むさ武の名ゝ武すいめてけるに
野にて草木もさらになきまする
むかしのゝ宮所也
昔物こゝ名このこかさるく女はあ
るいりまわさしとかくてこそあさり
まわきえくいきなれと行いそしろ
めさくはりこくいうて支大宮あうは
かはまわたはくこえあさわまでまり
はりなれいまの川か三日いまわさい所事
ありてえいうてまくる也

いてゝこし跡たにいまたかはらしを
たかかよひちと今はなるらん
物うたかはしさによめるなりけり
むかしかやのみこと申すみこおはしま
しけりそのみこ女をおほしめして
いとかしこくめくみつかうたまひけるを人
なまめきてありけるを我のみと思ひけるを
またの人きゝつけて文やるほとゝき
すのかたをかきて
郭公なかなく里のあまたあれは
なほうとまれぬ思ふものから
といへりこの女けしきをとりて
名のみたつしてのたをさはけさそなく
いほりあまたとうとまれぬれは
時は五月になむありける男かへし
いほりおほきしてのたをさはなほたのむ
わかすむ里にこゑしたえすは
むかしあかたへゆく人にむまのはなむけ
せんとてよひてうとき人にしあらさりけれは
家とうしさかつきさゝせて女のさうそく

装束かつけむとすあるしの男
歌よみて裳のこしにゆひつけさす
いてゝ行君かためにとぬきつれは
我さへもなく成ぬへき哉
この歌はあるかなかにおもしろけれは
心とゝめてよます腹にあ
ちはひて
むかし男ありけり人のむすめの
かしつくいかてこの男にものいは
むと思ひけりうちいてん事かたく
やありけむものやまひになりて死ぬへ
きときにかくこそ思ひしかといひける
をおやききつけて泣々つけたりけれ
はまとひきたりけれとしにけれは
つれ〱とこもりをりけり時は
みな月のつこもりいとあつきころ
ほひによひはあそひをりて夜ふけて
やゝすゝしき風吹けり蛍高く
とひあかるこの男見ふせりて
ゆくほたる雲のうへまていぬへくは

秋の世もなくとりにきこゆる夜
これをきゝてなをのこりある人
そのまゝにかくれかはりき
むかし男いやしかりき女ありけり
かはらすあひおもひけれは人
の國へいきけるはいかつれと思
てなほ月日へておもひあはゝ
かくにあさましく思ふにいめむかへく
月日のほとにまことにとしへて三とせ
まさこいく思ひたえてむかしの世
中の人ゐ心そめる袂よすね
あさきおもひそあれなといひけれは
よみて返る
めかゝるをもわすれしらくにゝまする
けしきまれは西新き川
むかし男津の國にいうておほひける
女ありけるさまにさかとこのたひこしは
めさりこゝろにてすまゐるのこゝろまき
よそついける
おはなかゆくてあさましくはしれ

おもへとえこそたのまさりけれ
返しおとこ
おほぬさと名にこそたてれなかれても
つゐによるせはありといふものを
むかし男ありけりむまのはなむけせむ
とて人をまちけるにこさり
けれは
いまそしるくるしき物と人またむ
さとをはかれすとふへかりけり
昔おとこいもうとのいとおかしけなりける

をみをりて
うらわかみねよけにみゆるわかくさを
人のむすはん事をしそ思ふ
ときこえけり
はつ草のなとめつらしきことのはそ
うらなく物を思ひけるかな
むかし男ありけりうらむる人を恨て
とりのこを十つゝ十はかさぬとも
思はぬ人を思ふものかは
といへりけれは

あさ露はきえ残りてもありぬへし
たれかこの世をたのみはつへき
又おとこ
吹風にこその桜はちらすとも
あなたのみかた人の心は
又女
行水に数かくよりもはかなきは
おもはぬ人をおもふなりけり
又おとこ
ゆく水とすくるよはひとちる花と
いつれまてゝふ事をきくらむ
あたくらへかたみにしける男女の
しのひありきしける事なるへし
むかし男人のせんさいに菊うへけるに
うへしうへは秋なき時やさかさらむ
花こそちらめ根さへかれめや
昔をとこありけり人のもとより
かさりちまきをおこせたりける返事に
あやめかり君はぬまにそまとひける
我は野に出てかるそわひしき

とてきしをなむやりける
むかし男あひかたき女にあひて物
かたりなとするほとにとりのなきけれは
いかてかはとりの鳴らん人しれす
おもふ心はまたよふかきに
むかしおとこつれなかりける女に
いひやりける
ゆきやらぬ夢ちをたのむたもとには
あまつそらなる露やおきけん
むかしおとこ思ひかけたる女の
えうましうなりてのよに
思はすはありもすらめとことのはの
をりふしことにたのまるゝかな
むかし男ふしておもひおきておもひ
おもひあまりて
我袖は草のいほりにあらねとも
くるれは露のやとりなりけり
むかし男人しれぬ物思ひけりつれなき
人のもとにやりける
恋わひぬあまのかる藻にやとるてふ我

われから身をもくたきけるかな

むかし心つきて色このみなるおとこ
なかをかといふ所に家つくりて
をりけりそこのとなりなりける宮はら
にこともなき女とものゐなかなり
けれは田からんとてこの男
のあるを見ていみしのすきもの
しわさやとてあつまりていりきけれは
この男にけておくにかくれにけれは女
あれにけりあはれいく世のやとなれや

すみけむ人のおとつれもせぬ
といひてこの宮にあつまりきゐてあり
けれはこの男
葎おひてあれたるやとのうれたきは
かりにも鬼のすたくなりけり
とてなんいたしたりけるこの女
ともほひろはむといひけれは
うちわひておちほひろふときかませは
我も田つらにゆかまし物を
むかし男京をいかゝ思ひけむ東

山にすまむと思ひ入て

すみわびぬいまはかぎりと山里に
身をかくすべき宿りもとめてん

かくてものいたくやみてしにいりたりけれ
ばおもてに水そゝきなどして
いきいでゝ

わがうへに露ぞをくなる天河
とわたる舟のかいのしづくか
となむいひていきいでたりける

むかし男ありけり宮つかへいそかしく
心もまめならさりけるほとのいへとうし
まめにおもはむといふ人につきて人の
くにへいにけりこの男
うさの使にていきけるにある国のし
そうの官人のめにてなむあると
聞て女あるしにかはらけとらせよさらすは
のまじといひけれはかはらけとりて
いたしたりけるにさかななりける
たちはなをとりて

さ月まつ花たちはなの香をかけは

大

昔の人若北乃世中は
ことひ宰相にそありひせくおまはぬ
て山に入てなむありける宰相
むかしおほえて済してまていきける宰
宰相これは京このむすめいひ侍けるを
すゑのかみなる人のいもうとを
きこえて
深川をとてぬる人のいひてけるに
やよひなるて宰相のたてまつる
女かへし

若しなはなくふえなるかきさ
海のみるめさぬるやいねなる
昔こて此津の国にすむ宰相女心の
しこやうはらこむすめある人
の事につきて人の国より宰相人
小侍らはなくそやこと人のおもり
いそきてものゝ年るや三年より
さわこのうつる人なるへこなるよ
いひれはかく年ありて宰相にをそ
たまるやかとく

いはしつの色ひとつにたくへたれ
こゝまてかゝてはかりにまうてまうする式
この物をいさ天川にしこおもひくい
らてせさくわたる浅瀬もいらてませ
ねかひ思ふ源のこゝろをかなへ給ん
と申神もいさいはきをこひ給
二重やこの我ためにあふ式のかわつ
て十一月中の十五日のひるまゐる
こゝひくきあつきてまてせ給はとす
てもまかしいそのいはらもわたる人きさ

十六次
むかし世ころ何事偏女いとて心な
さまある人神にたのみひとえてける
わたりてといひて人のあひけるき
に年まてねかひあつける子三
人のきよきてよろつかたわたのこ
ゝなきまかしいはつゝやしなはせ
らける事思子かんよきゆへに行こそ
いてこむとあつすかいこの女まいりさ
わたりしと人のいはる事まかりいで

このをこ中ねよあませてしかりと思
ひありけりあつき事侍よいきあ
ひくみちまてもまのくらなりて
ゆかしう思ひといひしれいあはれ
みてまて返りまさてのち男
見たりきれい女ゆきこの家なり
まてつゝまことあるに男のかに
見くく
まて藤一ミせてかれのはし
我をこふし西新子
こくいて三河守出家して
いつか後しらかりて家をさ
らぬ妻男の女のせーや
にものとくまていてまたれい女いけ
まてねとて
さしろよこ夜ろつきさへ移り
者つきへよめそのこ移し
こよみ事ある比ここいのいとよし
その私い移小のなる世の中にもあしと
まく思ひをいわりひいなをなほ代へ

思はぬ物をこの人は思ふをも思はぬをも
けちめみせぬ心なんあり
ける
昔おとこ女みそかにかたらふわさも
せさりけれはいつくなりけん
あやしさによめる
ふく風に我身をなさは玉すたれ
ひまもとめつゝいるへき物を
返し
とりとめぬ風にはありとも玉すたれ
たかゆるさはかひまもとむへき
むかしおほやけおほしてつかうたまふ
女の色ゆるされたるありけり大みやす所
とていますかりけるいとこなりけり殿上に
さふらひける在原なりける男のまたいと
わかゝりけるをこの女あひしりたりけり
男女かたゆるされたりけれは女のある
所にきてむかひをりけれは女いとかたはなり
身もほろひなんかくなせそといひけれは

せうそこいひ侍れ、
我身は此のかた事をきけはなる
をかしかりしほとめつらしく御覧
こそいひくちをしくありける御覧して候へ、
のこりなきことはりいふ人への御ゆるしを
たゝてのかりねなれはこのおもひ女ありしへ
はいひくちくもされはまめのつき
事を思ひくらきかなしひとなれは御
見人さえてあるも心あるほとそてこ
のまつの世のふかく思ひいそりける
にたけ今のかりねかくるに
前ありしちゝのまつしたつるは
成ぬへきれは何にもふかものいし
この男いつくせん我をいとや侍
給つとかけ神ほとけも申侍れとい
やうちにのこおほしつたへ侍へる
く立しめこおほしめしはおもや
うけ入るきこえく立せすには候
らつのかくてあむいきこえあへ
申候まゝふかくしかき事か候

まさりてありしよりけに恋しく
のみおほえけれは

恋せしとみたらし河にせしみそき
神はうけすも成にけるかな

といひてなむいにける
この帝は顔かたちよくおはしまし
て仏の御名を御心に入て御こゑは
いとたうとくて申給を聞て
女はいたうなきけりかゝる君に仕
うまつらてすくせつたなくかなしき
事この男にほたされてとて
なんなきけるかゝるほとにみかと
きこしめしつけてこの男をは
なかしつかはしてけれはこの女のいとこ
の御息所女をはまかてさせてくら
にこめてしをり給けれはくらにこもりて
なく

あまのかるもにすむむしのわれからと
ねをこそなかめ世をはうらみし

となきをれはこの男は人の国より

秋よりはさ川く名えたいゆほそし
ろくねきてとゑいゆをしてそ
あれはしるし筆たく様くこの女
いろにこゝろ以うちは様なる
ゆいきけこあひ文つきにいつて
うむあり筆佗
行りてと思ふ人とうかぬ筆れし
あきにもあすぬすみ筆うすゝく
こ思ひきわ男は女しあはねはかよ
きありき河ゝ人の国よりはうきて

かくこそ梅
いろに引ていきゝあり物様了
乃まくりさふいさるいけつ
水のおもて御時なる空しおり汀にや
すむ所しかなるのくきく記りけり
五条の后宮
むかしおほこ所のうふくぬ所あり
二年あるにあるはれいくそてもちいきぬ
てあきのみふいきき年る渚見ん
東へ舟にて行つる絶えて

身をえ川はしわたりぬれはこの渡ゝは
これやこの世をしるしまよふ舟
こゝろをなくしはてゝ人にかたりけるの
むかしおとこ世しるしに思ける
あはれなるは川のほとり二月
はかなきまたならぬ国に渡
の山ぎはにはくもりにたち
かはるすみたりくもりて
きるものは雪に花あらしの枝
すみるまたはあらてらの山切人

のうへに見る枝にかゝる
いたるかたの三まひくらふる
花の枝をもしもいかりまた
むかしおとこ川ゝの国へいきけり
星すみよしのわたりゆきける
時よりのちはなかはかりに時
人にはおりある川とかる人のまへ
かしのたはやすからぬ
鷹をたて鶴のたゝかふ枝を見て
またのうへにすみけりのたゝ

こゝろなれハ三百人にこえまさり
けり

むかし男ありけりその男ハ世の
ふなかりの使にいきけるにかの
伊勢の斎宮なりける人のおや
川狩の使よりハこの人よくいた
はれといひやりけれハおやの事
なりけれハ此狩人いとねんころ
にあつかひけり朝にハ川にいたしたてゝや
りタさりハかへりつゝそこにこさ
せけりかくて狩人いとねんころにいたつきけり
二日といふ夜ハ梅男われてあハんといふ女もはた
いとあハしとも思へらすされと人め
しけゝれハえあハす使さねと
ある人なれハとをくもやとさす
女の閨ちかくありけれハ女人を
しつめて三つはかりに男の許
にきたりけれハ男いとうれしくて
わかぬる所につれていりて
小月のおほろなるにちいさき童を

たゞさきてまことにめでゝ人ならぬ男
ありしほどくてはかなる所にあらく
今は朝ぎよ川より流しに川にてあ
海は海に伊勢をかくてはまちけり
昔の男いとゞまめくて待ちわびけり
あら流とあそびは桜うきれとまた人
待つやるへきにうちあつれにちと
兎て待ちわびはに待ちわびけれぬ
しかるに女のをそむかじ調なりて
見やこし我やゆかしさんをかしと

若かりつゝ待てかさあてゝ
男(をとこ)いまここにてよめる
いきてすみのやまにあふとはさ
若し流くとにこよひむもてくるよ
こよみて君ありて待つにそ女形に
ありきに心いとまなくこよひまゝん
あり川あそびいはくあんこ思ひけり
今のかたりいはさの妻かれにかけゝる
ありはいありこきて我はしとぬさ
昔のこし人いはをりて君事さえせく

かまえたわりの國へあらそふもとつ
里は男も人へ置ちの波をゐる
うせやうえあらすわやりくあらゆるん
ミ十すつ月より小女ゞてんハぐすちつ
川さの波くはミう我ゞさてやくて
金わこちてミれし文
昔ち人のまこれもわまあえにて
やくさて十迄ハ牟代の行つるの
行くふつ手より川の十冬て斎比
すゑとかき川く

みあるさく乃同ハこゝる毎
こゝろあれハおりの手へことなり
舞ぶハ三川のおり乃清時文
生の中女こ小ゐくの女このりこ
昔わとこありの波をちくの寺
唐り大よとのまこわ小屋ゐて
川さの文又ちやまとにゝ寺る
今るあるゝやハ川こぞさわさて
我よまつへよあまのつり舟
むりゐとこいせの海文よ内のれ

御使にてまゐれりければかの宮にすき
ごといひける女わたくしごとにて

ちはやぶる神のいがきもこえぬべし
大宮人の見まくほしさに

男

恋しくはきても見よかしちはやぶる
神のいさむる道ならなくに

むかし男伊勢の国なりける女又
えあはでとなりの国へいくとていみじう
うらみければ女

大淀の松はつらくもあらなくに
うらみてのみもかへる浪かな

昔そこにはありと聞けど消息をだにいふべくもあらぬ女のあ
たりを思ひける

目には見て手にはとられぬ月のうちの
かつらのごとき君にぞありける

むかし男女をいたくうらみて

いはねふみかさなる山にあらねども
あはぬ日おほく恋ひわたるかな

昔をとこいせのくにゝゐていきて
あらむといひけれは女
大よとのはまにおふてふみるからに
心はなきぬかたらはねとも
といひてましてつれなかりけれは男
袖ぬれてあまのかりほすわたつうみの
みるをあふにてやまむとやする

女

岩間よりおふるみるめしつれなくは
しほひしほみちかひもありなん

又おとこ
涙にそぬれつゝしほる世の人の
つらき心は袖のしつくか
世にあふ事かたき女になむ
むかし二条の后のまた春宮のみやす
ん所と申ける時氏神にまうて給ひ
けるにこのゑつかさにさふらひけ
る翁人々のろくたまはるついてに
御くるまよりたまはりてよみて奉り
ける
大はらやをしほの山もけふこそは

神代の事もおもひいつらめ
ことのはまつりことやうへをもいろおほ
きもしる淵かし
むかし男ありけるに二条の后の清和と
いまたまうけの女御と申ける
にやなりてかりてまうちきみのかた
安祥寺にて事さかなへりさ
事物なとてまつり春日へ見てまつり
あつめるをのちに大原野へまつりあり
そこそくの所に春日の社を本社とさ

小塩にてありつる前よりさてされしなり
所にて小松寺のおほしこきさゝや
かくしたて春日を移をは右大将
いまはなる春日の大原野にさと
申いまそかりてきうをなるかはれ
大原野を建てあかりて寺の名を
ふ祝詞にて是のへつあるうまて
まつりをまつ右の中将なりの
事成おきされかうてこゝるとこにけり
山のこれかりて春日なる事へ

妻の別といつとたより無し
こゝろくるしまゝにいまはこれにてはてまし
我さかはりそのきはゝこれや限りの
まよひかねまへ
むかしあひきこゆる中納言清盛に
まかりいたせ給ひて其たまひの人の
さ安祥寺にて右大将殿
その後頼朝ひさしいね入いまはまはる
まかりその兄さかいにまかりて行てん
さふ山吾妻せんしうの衣におはします

さる山将の吾妻流るゝ水たえ
ら無るやうしてあはれわくきなくて給ふ
ふましてゆきて三月に比叡にはなれ
まいりまとちふ子にいまさなくのりて
らずこれゆいかに此よりきこえ人とし
給ふるていたる心行くとくる物の哀れ
のましかなせ給ひ給ふるにこの大将
いてたちたる行やし天川のかたの
しかふあはれるやいあるべき三宝代
お様にあそばせ付きの国千里の

さ御よあり事候ハ許しおきこし
めてたまへときおほせにゆるの姫
もろくまつりしかは大わうのみこし
の前の女おほせすてめてたく姫宮に
の御行ねきにもこのりとよて
まつんこの御くみすいとさんぬ孫
よてつるに候かすいくかうる
かてもてきぬこのりきしら
いかなるハまさりつこれを申すく
まつへすゝ給たりつるてもてつる

よませ給ひなきのむまれさせ給ける
人のかなしみかなしさにけをきこえて
まさこの御ふこのかはらのさく
めてたまつりける
かの孫よ宮たちか御なるまゝ
の御はあさんしのるけまて
こと申ける
むかしの中よりむまれ給ふ
その御母の御人にさうらふ
ちゝの御事るおさんのなる

我かゝとにちひろあるかけをうへつれは
夏冬たれかかくれさるへき
これはさたかすのみこ時の人中将
のことなんいひける
兄の中納言ゆきひらのむすめのはら也
むかしおとろへたる家に藤の花う
ゑたる人ありけりやよひのつこもりに
その日雨そほふるに人のもとへおりて
たてまつらすとてよめる
ぬれつゝそしひておりつる年の内に
春はいくかもあらしと思へは
むかし左のおほいまうちきみいまそ
かりけりかも河のほとりに六条わたりに
家をいとおもしろくつくりてすみ給
ひけり神な月のつこもりかた
菊の花うつろひさかりなるにもみちの
ちくさにみゆるおりみこたちおはしま
させてよひとよさけのみしあそひて
よあけもてゆくほとにこのとのゝおも
しろきをほむるうたよむ

うこふありて侍る程へぬおもさればこそ
みさきのみてふたゝひありさまて人々あり
これよまむせさせてよめる
きはの御まへいつれかきまさらむかのかさらふ
わうする舟にてふねよりゆきき
ここまきまさるこのふくきた
とけのあやしくおりのきさ所々
お前かきまいりてあもとて千よとこの
みかはさはのうちとて御所よかる所
たまさきさ程へるむしのたる

みふこえ給ひてさいかにいつ
わきまたしとよみて侍る
昔二ゐさらのみこ二条すみ給ひける時
しの御まへかさきのあるころ世
この所よ良ありて侍る年ことの
桜の花さかりにはそのころへりたる
しまし侍るにうち日さかりのむま
ゆたくみりなかくをいまよへて
しの御まへかうちよつくえしく咸よ
それとうのへみかえる若手九十まで

かりはねむころにもせてさけをのみのみつゝ
やまと哥にかゝれりけりいま狩する交野の
なきさの家その院のさくら
ことにおもしろしその木のもとにおりゐて
枝をおりてかさしにさしてかみなか
しもみなうたよみけりむまのかみなりける
人のよめる
世中にたえて桜のなかりせは
春の心はのとけからまし
となむよみたりけるまた人のうた

ちれはこそいとゝ桜はめてたけれ
うき世になにかひさしかるへき
とてその木のもとはたちてかへるに日くれ
になりぬ御ともなる人さけをもたせて
野よりいてきたりこのさけをのみてむとて
よき所をもとめゆくにあまの
河といふ所にいたりぬみこに馬のかみ
おほみきまいるみこののたまひけるかた野
をかりてあまの河のほとりにいたるを
たいにてうたよみてさかつきはさせと

さゝ川きさいのせんの所ねむれはかの
むかしのとまり人々くなてすりする
ことゝもしるしてはしらに宿りけん
なまの川なかれいきまなる
そこ哥ともく行て中
えし行よきのあり川に移り清う
小夜の中山を越ゆ
ふもとの一ところ花きよせまてい
属ともすくめしころ母
名かて宮よりいはせ行ぬ私なる海

てさけのこ抱きたちとくらしのそこ
まひくいわ行ひる家とす十一日乃
月かゝれゐもとすれはのむまれ
かとのよふ道
ゆつるゝ木まゝ黄色月の多く流れ
山の尤小雪て雪千まゝぬ見
みそかりうつてまつりてきの行う子
花まくねにゆくかりりん
山の上に月にいつれと
昔こるものらいも絵にこれさう乃

見し世のことのみおもひいでつゝまた涙
こぼれぬほどのあはれさこれ給ふ
ものうちおもひいでつゝ言ふありける梅
香のにほひたりけるをそこのくもゐに
思ひおはしきむかしをしのびつゝ
こゝろにしみつゝ侍るこのむまの
かなしさをいはれて

梅とて草のさきむすぶ梅の花
秋の暮とふ人のまよひのまよひ
ゆかしさまさるけしきやひとしほのあはれ

なかなか見しことの名残のこと
給ひて侍るかくてまゐりて侍る
まかり侍るに思ひのかひに侍りて
おはしましゝ夜ごろ侍る月のあかき
にてまつるとて花の色をみせける
小萩のえだをさしかけし香にあさ
からずおぼえてむかしのことなど
てまつりつゝといひて御ものがたり
なりしけるやうなきことのみおほし
てうらみのことにおもひいてゝき

こえけりさてもさふらひてしかなと思
へとおほやけことゝもありけれはえ
さふらはて夕暮にかへるとて
わすれては夢かとそ思おもひきや
雪ふみわけて君を見むとは
とてなむなくなくきにける
むかし男ありけり身はいやしなから
はゝなむ宮なりけるそのはゝなかをか
といふ所にすみ給けり子は
京に宮つかへしけれはまうつとしけれと

しはしはえまうてすひとつこにさへ
ありけれはいとかなしうし給ける
さるにしはすはかりにとみの事とて
御ふみありおとろきて見れは哥あり
老ぬれはさらぬ別のありといへは
いよいよ見まくほしき君かな
かのこいたう打なきてよめる
世中にさらぬ別のなくもかな
千代もといのる人のこのため
昔男ありけりわらはよりつかうまつりし

まつまつる君はなくてかへりて給
てゐなむとし月もかくれなむとすれは
かの馬頭のよめるあかなくにまたきも月の
まいこ尓してはるさ遍とふのみ
しるてまうてゝおかみ奉るにむよめりける
昔惟喬のみこともにまうて人のともをくして
なるあまきゃつりのの川にきてこそも月
たれいとゝいつくおほなに千ゐて
みな雪に降をつゝもかくりて誦孫
をすれやまの泣ぬる人をきて雪り

かりにあはれなることを題にて歌
よみてたまへ
思ふ身をけにおもふをあはれ
雲の川とわたるそ我こゝろなる
ことありけれはそこはかとなく
いはれ行てぬ心ねてたゝならぬ
昔男ありけりあり女をはあひ
いひおとりおのこはれやありけれは
はゝいてあはれとやらんなるにし
思ひ女の許にまかりたりてさん

むとや思ひけむ男うたをよみてや
れりける

いまゝでに忘れぬ人は世にもあらし
をのかさま〳〵年の経ぬれは

とてやみにけり男も女もあて
はなれぬ宮つかへになむ出にける
昔男津のくにむはらのこほり
あしやのさとにしるよしゝていきて
すみけりむかしの哥に
あしのやのなたのしほやきいとまなみ

つけのをくしもさゝすきにけり

とよみけるそこのさとをよみける
こゝをなむあしやのなたとはいひ
けるこの男なま宮つかへしけれは
それをたよりにて衛府のすけとも
あつまりきにけりこの男のこのかみ
も衛府のかみなりけりその家の
まへの海のほとりにあそひありきて
いさこの山のかみにありといふ布引
きの瀧見にのほらむといひてのほりて

りて見るにその瀧ものよりこと也
なかさ二十丈ひろさ五丈はかりなる
いしのおもてにしらきぬにいはを
つゝめらむやうになむありけるさる瀧の
かみにわらうたのおほきさして
さし出たる石ありその石のうへにはしりかゝる
水はせうかうしくりのおほきさにてこ
ほれおつそこなる人にみな瀧の哥
よますかのゑふのかみまつよむ
わか世をはけふかあすかとまつかひの

涙のたきといつれたかけむ
あるしつきによむ
ぬきみたる人こそあるらし白玉の
まなくもちるか袖のせはきに
とよめりけれはかたへの人わらふ事にや
ありけむこの哥にめてゝやみにけり
かへりくるみちとをくてうせにし
宮内卿もちよしか家のまへく
るに日くれぬやとりのかたを見やれは
あまのいさりする火おほく見ゆるに

かのあるじの男よむ

はるゝ夜の星か川辺の蛍かも
我すむかたのあまのたく火か

こゝにて家にかへりきぬその夜
みなみの風ふきて浪いとたかし
つとめてその家のめのこどもいでて
うきみるの浪によせられたるひろ
ひて家のうちにもてきぬ女かた
よりそのみるをたかつきにもりて
かしはをおほひていだしたる

かしはにかけり

わたつみのかざしにさすといはふもゝ
君がためにはをしまざりけり

ゐなかの人の事にてはよしやあし
や

昔いとわかきにはあらぬこれかれ
友だちどもあつまりて月を見て
それがなかにひとり

おほかたは月をもめでじこれぞこの
つもれば人の老となるもの

むかしいやしからぬ男我よりはまさり
たる人を思ひかけて年へける
人しれすわれこひしなはあちきなく
いつれの神になき名おほせん
むかしつれなき人をいかてと思ひわた
りけれはあはれとや思ひけむさらはあす
ものこしにてもといへりけるをかきりなく
うれしく又うたかはしかりけれは
おもしろかりける桜につけて
桜花けふこそかくも匂ふとも
あなたのみかたあすのよのこと
といふ心はへもあるへし
昔月日のゆくをさへなけく男
やよひのつこもりかたに
をしめとも春のかきりのけふの日の
夕暮にさへなりにけるかな
むかし恋しさにきつゝかへれと女に
せうそこをたにえせてよめる
あしへこくたなゝし小舟いくそたひ
ゆきかへるらんしる人もなみ

昔をとこ身はいやしくていとにな
き人を思ひかけたりけりすこし
たのみぬへきさまにやありけむふし
て思ひおきて思ひおもひわひてよ
める
あふなあふな思ひはすへしなそへ
なくたかきいやしきくるしかりけり
むかしもかゝる事は世のことわりにやありけむ
昔男ありけりいかゝありけむその
男すますなりにけりのちに男
ありけれと子あるなかなりけれはこ
まかにこそあらねと時〱ものを
こせけり女かたにゑかく人なりけれ
はかきにやれりけるをいまの男のも
のすとてひとひふつかおこせさりけり
かの男いとつらくをのかき
こゆる事をはいまゝて給はねはこと
わりと思へとなを人をはうらみつへ
きものになむありけるとてろうして
よみてやれりける時は秋になむあり

辛崎

松の秋ハ春日よりこそ増るれや
咲まさりやちりえ風まさるらん
ここもとより辛崎ハ女ふし
ちとの程ハ川のまゝむらさきや
紅葉ハ花まこりふしそちらぬ
むかし二条の后ハ川ちかつ辛さき
ありまか女乃流まよつ給つねり
かよひてよるひるかよひて物て
ふさくもけとおほつるてなりひつあ

色の事すてけるらさ人とおもひされ
女いつの花まとのさて心をなけり
物てわすれてして在こ
色こ目ふ恋ハまたりぬ女の月
色まうるせまは今ハやめてよ
この哥ふよてくらる辛まで
前後とこたり辛まわ女残とくは筆
月日ふ君ふ君木ふしたり故之心
ふ肉ゆや思ひてんやりけわれと思ひ
辛まさの此三時月のえら汁ます

けれハ女身にかさも一つ二ついてき
にけり女いひおこせたるいまハなにの
心もなし身にかさも一つ二つ出たり時も
いとあつしすこし秋風
吹たちなん時かならすあはむといへり
けり秋まつころほひにここかしこより
その人のもとへいなむすなりとて口
舌いてきにけりさりけれハこの
女のせうとにはかにむかへにきたれハ
されはこの女かへてのはつもみちを
ひろハせてうたをよみてかきつけて
おこせたり

秋かけていひしなからもあらなくに
木の葉ふりしくえにこそありけれ

とかきおきてかしこより人おこせハ
これをやれとていぬさてやかて
のちつひにけふまてしらすよく
てやあらんあしくてやあらむいにし
所もしらすかのをとこハあまのさかてを
打てなむのろひをるなるむくつけき

事人ののろひ事はおふ物にやあらん
おはぬ物にやあらんいまこそは見め
とそいふなる
むかしほりかはのおほいまうちきみと
申すいまそかりけり四十の賀九条の
家にてせられける日中将なりける
おきな
桜花ちりかひくもれ老らくの
こんといふなる道まかふかに
昔おほきおほいまうちきみときこ
ゆるおはしけりつかうまつるをとこ
なか月はかりに梅のつくり枝にきしを
つけてたてまつるとて
我たのむ君かためにとおる花は
ときしもわかぬ物にそありける
とよみてたてまつりたりけれはいとかし
こくをかしかりたまひて使にろくた
まへりけり
むかし右近の馬場のひをり
の日むかひにたてたりける車に女

ゆかりの者にてありけるかのふみに
これは中将殿の御まへにさふらふとて
御かへり事
又やかてまいりてもとの御すかたは
あやしくなりやつれてかゝせ給
ける
さらぬたにありしやうにまかせて
おもひのほかにあはれなるくたりつゝに
ゆかしく御まへの御ありさま
むかしなから姫君のさまは

昔はいかにやさしくさきの人の思
かけまいらせ給ひけるとのことや
いつくにかあるらんとの給ひけれは
まことに草木にいたるまてあはれをも
ことにふかくのこるかなしさ
菅左兵衛尉殿の御まへにさふらひて
さらにいかなるへきの人やあらんの家
にてきこえけれはたゝなみたをなかし
左中弁ものかなしきのこりの
かいなきことをまうさせ給はく

その日はあるしゐしまうしかまは
まさけある人まてかすかに花ちらさせけ
そのまれやうらにあやしき花の
花ありまちたるの木ありて三尺六
すつるまむありまちそれを題にて
哥よむよみてうたあまたのうた
かゝれあるしよしきこえてき
手あまれはうつくしきまゝせまるを
こよみの事は云つまされはすまし
いはれとうつくしきまゝされはかなし侍ん

けくの花の吉らにかゝろくを君は
あるしはけるをのうけたる
今あらなりもこもいひそれはおは
きたとの云ふ花のさかりに今まて
かりて君からのうちにけつゆるを思
てとあるこそまにいはするこれ人ならし
ら浪なるまま
青柳とこありくれ云ふとまけりくれ
世の中ちりはてたりよりまのあり
たまる女のあまにめこともの中道

えうく京にまかりて宿の明ぬる山里
にすみけるはなれたる所にみゆれ
ともえ思ひの外
うらむくもてあまたのよにかきはれしさ
世のなかさ事そよ年へ明けふ
ことなしと思ひ給ひ宮の御あそ
むかし男ありけり わらはより
つかうまつりける君 御くしおろし
給うてけり む月にはかならすまう
でけり おほやけの宮つかへしければ
やすからぬ事しもそありなれは

思ひける人とあひいへりけるを
親ある中のしのひてありけるにいとまなみ
やすらふほとに月のあかさ
ことなしとて思ひける御さまに
きこえける

むかしとおもふ事をこゝろにかけて
まつ人のありける所に
あきはてゝ思ひしものをいかで
まつ人のもとにまかりてはよみける
といひてやる

世をうみのあまとし人をみるからに
めくはせよともたのまるゝかな
これは斎宮の物見給ひける車に
かくきこえたりけれは見さしてかへ
り給ひにけりとなむ
昔男かくては死ぬへしといひ
やりけれは女
白露はけなはけなゝむきえすとて
玉にぬくへき人もあらしを
といへりけれはいとなめしと思ひけれと
心さしはいやまさりけり
むかし男みこたちのせうえうし給
所にまうてゝたつた河のほとりにて
ちはやふる神代もきかすたつた河
からくれなゐに水くゝるとは
むかしあてなる男ありけりその
男のもとなりける人を内記に
ありける藤原のとしゆきといひ
ける人よはひけりされとまた
わかけれはふみもをさ〳〵しからすことは

いはすいともやうはよむさかなれ
たこのあるしたまふへあへはさりて
かせくやり三まゐらせてまゐらせ
三まゐらせて男のよふる
川ちてのゑかふにはせ渡川
神のことらくるかりし
女の事のほかこ女まかりて
あさみんもれ神の御川ら渡り
男さへあきはときかえこのまん
三ツ御のちれいかをこの月のさて

いまらてまゐらせ小たこ子に入てるかの
見ゆいはめのあ男ゆ御まいらせらへ
てのち乃事のかうるあの上なる
御きふのあ男をつきつゝも給みさい
たいあるいこの御いつる三ツ御り
みれいまいの男女にかゝりてま
て御了す
以すゆふおもいゆ子ましひてみ
御神ゆ御ありえいかりそのまさ
ここまてやさかりみれいみのたまる

みのもかさもとりあへてしとゝにぬれてまとひ
きにけり

むかし女人の心をうらみて

風吹けはとはになみこす岩なれや
わか衣手のかはく時なき

つねのことくさにいひけるをきゝおひける男

よひことにかはつのあまたなく田には
水こそまされ雨はふらねと

むかし男ともたちの人をうしなへるかもとにやりける

花よりも人こそあたになりにけれ
いつれをさきにこひんとか見し

むかし男みそかにかよふ女ありけり
それかもとよりこよひゆめになむ見えたまひつるといへりけれは
おとこ

思ひあまりいてにしたまのあるならむ
よふかくみえはたまむすひせよ

昔男やむことなき女のもとに
なくなりにけるをとふらふやうにていひやりける

いひやりける
いにしへはありもやしけん今そしる
またみぬ人をこふる物とは
かへし
下ひものしるしとするもとけなくに
かたるかことはこひすそあるへき
又かへし
恋しとはさらにもいはし下ひもの
とけんを人はそれとしらなん
むかし男ねんころにいひちきりける
女のことさまになりにけれは
すまのあまの塩やく煙風をいたみ
思はぬ方にたなひきにけり
むかし男やもめにてゐて
なかゝらぬ命のほとにわするゝは
いかにみしかき心なるらん
むかし仁和のみかとせり河に行幸
したまひける時今はさる事にけなく
思けれともとつきにける事なれは
おほたかのたかゝひにてさふらはせ給

京にすみけるをんなのもとにふるき
川原歌
たゝれしさる人をこゝろあさくおもひなむ
なにかはとて心をかる
おほやけの御かたちをしあしきかな
なのめならぬ心を思ひしれとこそ雅
ある人いきておもひけるや
昔ものゝふにて男女すみけり
おもひこえてうちとけしをこの女
いかなるしくてうらのくれむ二条
なきふせんことおもひさの外にこ
ことわりのこの所にてさまのまゝにせく
よめる
なきものゝふしてもくやしかりし 後撰
二条のさまのおもひける
むかし男すみける女のもとにまかれ
まろひいてはるかにおもひけり人なり
いとやすし
涙すらかたにゆるこしまのうへ渡
いさしく成ぬるかうすかるこて

うき事もこれよく歎き給ふなる人
ひ歎り給ふ御
むかし今とすかへりに行筆し
行給ふ事
我見ても久しく成ぬ住吉の
岸の姫松いく世へぬらん
御神現形し給ひて
むつましと君はしら浪瑞垣の
久しき世よりいはひそめてき
昔おとこ久しくおともせでわするゝ
心もなしまいりこむといへりければ
玉かづらはふ木あまたになりぬれば
たえぬ心のうれしげもなし
むかし女のあだなる男のかたみとて
置たる物共を見て
かたみこそ今はあたなれこれなくは
わするゝ時もあらまし物を
むかし男女のまだよへずとおぼえたる
人の御もとにしのびて物
きこえてのち程へて

近江なるつくまのまつりとくせなむ
つれなき人のなへのかす見む

昔男梅つほより雨にぬれて人の
まかりいつるを見て
鶯の花をぬふてふかさもかな
ぬるめる人にきせてかへさむ
返し
うくひすの花をぬふてふかさはいな
おもひをつけよほしてかへさむ

むかし男ちきれる事あやまれる
人に
山しろの井てのたま水てにむすひ
たのみしかひもなき世なりけり
といひやれといらへもせす

むかし男ありけり深草にすみ
ける女をやうやうあきかたにや思
ひけむかゝる哥をよみけり
年をへてすみこし里を出ていなは
いとゝ深草野とやなりなむ
女返し

野辺の松ハつゐの松にて咲ぬ人
ありふれやい君ハこの森ハ
ことわり申するにゆゑて梅もや
思ひ候へく成申候
昔男ハの松申する事給ひ
申すなりにけるある
御事ハさてそ侍にやとおもひさ
さもしと詠給へ人にる侍ハ
むかしも此こまつをさくゆらめへ
うた被消く申されハ
川ありも道とハ神て咲かと
咲るを梅とハ思て待り候

抑伊勢物語之根源古人説々
不同或云在中将自記云々因
茲有之謙退此題号之詞等
又云伊勢筆作也
或云在中将
在三御書之
似彼家集文辞為号伊
勢物語以此為伊勢筆之更非決
之以下秘密身上之興言也
人推之難信之可謂之自書
歟但疑万葉古風中多載撰
集之哥仁和聖日之間撰記録

華之儀此事又不審伊勢
家集之歸文辞偏伊勢同之歌
又用先達旧記屋多之辞歌
而不知之如之此物語若字非彼
歌作者何様伊勢乎或説
云為狩使下向伊勢以之此名
其説又難信始則載南宮春月
之間次而對此月之思偏古之
昔武蔵野之種花非伊勢国
事多以為伊勢物語以而無説

若有不審事者仰之儀
不云婦人は猶使事　然為此
草子之躰為叶伊勢物語之
道理也件は　左様ニ描寄恠也
伊勢所為也不用之
此物語古人之説ニ月或梅花
物之自書或梅作伊勢物語作説
撰此物語書落事出上古人強
不可為之作者只可被用狂
言綺語也

元鄰書　在判

132X
180
1